提出締め切り: 帰国後 1 ヶ月以内　　提出先: shien@asafas.kyoto-u.ac.jp

京都大学大学院　アジア・アフリカ地域研究研究科
フィールドワーク・インターンシッププログラム 2011 年度　JASSO 派遣報告書

報告者氏名　　片桐　昴史　　2011 年度（入学）

1.研究課題：

セネガル共和国のマングローブ林における住民の環境利用とその影響評価

2.派遣期間：

平成　23 年　11 月　1 日　　～　　24 年　1 月　31 日　　（　　92　　日間）

3.今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

今回の派遣では、調査地の選定とフランス国立研究所における地図や関連文献の資料収集と調査地における聞き取り調査を行う事ができた。調査地としたパルマラン地域共同体（CRP）は、首都ダカールからおよそ 200km 南東に位置し、ファティック州フィムラ郡に属する。行政区分としては5つの村サムサム SamSam、セセンヌ Sessène、グヌマン Ngounoumane、ゲッジ Nguedj、ジャハノール Diakhanor と1つの小集落ジフェール Djifer から構成される。パルマランの東側に広がるマングローブ林は、Rhizophora mangle, Laguncularia racemosa, Conocarpus erectus, Avicennia geminans, 計 4 種で構成されていた。CRP の報告によれば、パルマランの全人口の 97%がセレール族である。セレール族が話すセレール語では、これら4種のマングローブ樹種にそれぞれ現地名があり、その利用は多岐にわたった。2001 年にパルマラン地域共同体自然保護区が制定されて以来、薪などの直接的な利用は制限されたものの、ゲッジ、グヌマン、ジャハノールの3つの村では魚介類獲得のための内水面漁業への依存度が高かった。とくにジャハノールでは、女性を中心にカキ等貝類の採集が盛んに行われていた。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について

自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について　はじめの一ヶ月間は、首都ダカールを拠点に調査地選定のため各地を回るとともに現地語のウォロフ語の習得を行った。半月の間に、あいさつや移動交渉など生活に必要な最低限の会話ができるようになった。その後約2ヶ月間、調査地のパルマランでカウンターパートとその家族からセレール語を学んだ。3 ヶ月間の調査を通じてウォロフ語、セレール語ともに最低限の会話覚えた。　今後の課題としては、やはりフランス語の習得をあげたい。セレール族のほとんどは、第二言語としてウォロフ語ではなくフランス語を習得している。また、セレール語では言い表せない表現も多く住民の会話でフランス語がまじる場面もしばしば見受けられた。次回の渡航に向けてフランス語を習得し、口頭伝承による歴史や保護区内における資源採集をめぐる住民と森林局とのやりとりなどの調査や旧宗主国フランスにおける資料集に備えたい。

5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか？

研究をはじめる予備調査としてのフィールドワークを行うために、貴プログラムを利用させて頂いた。アフリカをフィールドにし研究をするためには、やはり航空券に 1 番お金がかかる。今回、幸いにも私がフィールドとしたセネガル共和国への航空券は、三ヶ月以内だと20 万円前後と24 万円の枠内に収った。予防接種や滞在費のことを含めるとすべてを賄うには足りませんが、調査地や研究内容に自由度が高い貴プログラムは、とくにフィールドワークを重視した研究の初期段階において大変有意義なものだと思う。贅沢な話ですが、私がフィールドとするセネガル共和国の公用語であるフランス語や主要な現地語であるウォロフ語を現地で学べるプログラムがあれば、ぜひ参加したい。

署名